

巻 頭 言

文化創造学科紀要もようやく第3号を迎えることとなった。そして、本年度紀要号には文化創造学科の第1期生の卒業研究のリストを掲載している。ようやく学科としての形が整ってきたという感慨を、改めて感ぜずにはいられないものがある。

短期大学部の教員は、学生指導・教育にかかる比重が非常に大きい。その職務を十分に果たしながら、それぞれの研究もたゆむことなく続けられていること、そして、学生の卒業研究や制作の指導にも心血を注がれ、ここに掲げたように、多くの学生が、それぞれの成果をまとめることができたことは本学科の誇りとするところである。

本学には、それぞれの教員の専門分野に対応する、学部各学科の紀要もあり、本学科の先生方も、これらの紀要にも研究成果を発表されている。文化創造学科紀要号は、先生方にとってのもうひとつの研究発表の場ともいえるわけだが、号を重ねるにつれて、独自の存在意義が見えてきたように感じている。

本号に掲載された先生方の論文は、本学科の多様性を反映し、多様な分野にまたがっている。長年継続され論考を深めてこられた研究もあれば新たなテーマに挑まれた研究もある。それら、多様な研究を俯瞰できることが、他にはない特色のひとつであろう。

研究は、それぞれの専門分野によって、それぞれの発想のしかた、アプローチの方法を持っている。自分の専門分野の中だけでは、他の分野の研究方法に触れる機会はそれほど多くないのではないだろうか。文化創造学科は、様々な研究のキャリアを持った先生方が席を並べており、その多様性が先生方の研究の幅を広げる芽を育みつつあることを感じている。

「文化創造」という、とてつもなく大きな名を頂いたわれわれの学科が、何を「創造」することができるのか、これまでの3年間、自問自答を繰り返してきている。刷り上った本号を手にとって見ると、「創造」を、研究の視点から繙く鍵が浮び上がってくるのではないだろうか。

「文化創造学科紀要」を基盤として、様々な領域の研究者の活発な意見交換がなされ、その名にふさわしい、新たな視点を持った研究が次々と発表されるようになることを願ってやまない。

(木村 信之)